

## 自由図書の一部 優秀賞

### 福島多慧子さん 文学部英語英米文学科 4年

『桐島、部活やめるってよ』 / 朝井リョウ著, 集英社

#### 「スクールカーストの中に隠れている救い」

どんな集団にも目に見えないカーストが存在する。それが顕著なのがスクールクラスだ  
と思う。同じメンバーが毎日集まって、勉強だけでなく体育祭や文化祭などの行事をこなせ  
ば、あつという間にクラス内で力関係が生まれる。そんな目には見えないが複雑で緻密かつ  
絶対的なスクールカーストを鮮やかに描いているのが、『桐島、部活やめるってよ』という  
小説である。

本書に桐島は登場しない。バレー部のキャプテンで、カーストの頂点とも思われる桐島を  
取り巻く5人の高校生の物語だ。5人のスクールカースト内での立ち位置はバラバラだ。全  
員自分がどこの位置に属しているかを把握し、どのような振る舞いが適切であるかをきち  
んと理解している。そんな生活の中で、一人一人が誰にも言えない悩みを抱えている。

この小説の見どころは、誰もが経験したことがあるスクールカーストの正体を、各層にス  
ポットライトを当てることで明らかにしたところにある。しかし、読み終わって心に残るの  
はもう一つの真実である。それは、誰もが誰かにとっての眩しい存在になりうるというこ  
とである。本書に登場する前田涼也は映画部という目立たない部活に所属し、共通の趣味をも  
つ友人と教室の隅で語ることを唯一の拠り所としている。彼はカーストの下層から抜け出  
すことができず、ふがいない高校生活を送っている。しかし唯一、映画部の仲間と映画を撮  
っているときは、周りを忘れて熱くなれた。一方で、スクールカースト上層の派手なグルー  
プに所属している菊池広樹は真逆の生活を送っている。可愛い女子と付き合い、一度も練習  
に参加していない野球部でエースとして扱われるくらいに運動神経も抜群だった。本気で  
何かを頑張らなくても何でも手に入るような気がしていた。そんな中、朝礼で前田が自作映  
画を表彰されたことから、彼が教室の隅で毎日友人と夢中になって何かを語っていたこと  
を思い出す。そして自分も本当は何かの本気になりたいということに気が付く。前田と菊池  
は言葉を交わしたり、仲良くなったわけではない。カースト内の層が違う彼らは、お互いが  
まるで見えていないかのように毎日を送っていた。しかし、実は自分たち自身でさえも気づ  
いていない光を相手に見出しているのだ。こうして、誰もが思いがけないところで誰かの光  
になっていることがある。

カーストの中に居続けることはとても窮屈なことである。まして自分が最下層に所属したときには、あらゆる権利が目に見えない形で奪われていくような気にもなる。しかし、同時に救いもあるということを忘れてはいけない。それはキラキラしてみえるあの子にも、一人の帰り道に泣いてしまうような悩みがあるということ。そして、誰もがそれを簡単に丸ごと救ってしまうことがあるという事実である。